

◎本会の動き◎

☆第7回女性技術者ネットワーク☆

化学工学会 男女共同参画委員会は、老若男女が共に生きる社会の形成を通じて、化学工学分野における多様化に対応できる人材育成と化学技術イノベーションの推進の実践を目指して様々な取り組みを行っています。その一つに女性技術者・研究者が情報ネットワーク作りを行う「女性技術者ネットワーク」という小人数の会合を2012年から継続的に開催しております。第7回は7月14日(火) 18:30から学会事務局会議室にて開催致しました。講師には、成蹊大学 青柳里果氏(理工学部 物質生命理工学科 准教授)および株式会社東芝 小林幸子氏(セミコンダクター&ストレージ社 半導体研究開発センター リソグラフィ研究開発主査)をお呼びし、ライフ・ワーク・バランスや研究に関する貴重な経験等に関してご講演いただきました。ご講演後は、参加者一同にて、情報交換を兼ねて、交流会を行いました。

女性研究者、女性技術者が少ない化学工学分野では、女性は会員同士の情報交換の場に参加しにくく、男性間では当たり前のように交換される情報をなかなかキャッチできない、また、せっかく学会に出席しても知り合いが少なく、ざっくばらんな情報交換や仕事の悩みを言い合える仲間もなかなか見つからない、といったことがあります。そこで、この会合は、地道に知り合いを増やしつつ、お互いの貴重な経験、悩みや生きがいを共有することで、お互いに前に進んでいければとの思いで、女性限定で、社会人、学生を交えて開催しています。

ご講演者の青柳氏からは、准教授として大学に職を得るには、



ご講演者：青柳 里果 准教授(成蹊大学)

30歳くらいまでに応募し、応募に際して件数が多いと論文数で足切りされるため、化学系では年齢以上の論文を発表していることが必要であること。研究室の運営は研究と教育の両面があり、特に教育においては、学生一人一人の抱えている問題が個性的で対応が大変であるが、やりがいもあること。研究費は、外部からの研究助成の獲得が欠かせないが、苦勞が絶えないこと。研究成果を学会発表などで企業にアピールし、共同研究などの外部資金を獲得していること。さらに、女性として気にかけている点として、海外の学会では日本女性は静かで男性に常に従うと誤解されているので、その考えを覆すべく積極的に発言していること。自分で強制的に時間を作って、仕事以外に行くことを決めているなど、実体験に基づいたお話をしていただきました。

ご講演者の小林氏からは、企業ではまず特許出願が論文発表より優先されること。査読付きの論文発表を行っていれば、学位取得に有利との上司からのアドバイスにより、発表を継続し、子供を寝かせて部屋の電気を消し、デスクライトで博士論文を執筆して念願の学位を取得したこと。ご自分の学位取得のメリットとして、国際学会での役割や講演機会の増加があったこと。また、仕事上の経験から、男性部下や年配の方への仕事の指示には敬意をもって行い、女性に対する仕事の指示では、最低限の目標を示すとそこまでしやらないので高めの目標を設定すること。人脈づくりには、ゴルフはお勧め。子供には自分で判断できる自立した人間になって欲しいことなどをお話ししていただきました。東芝は、かつては女性社員も女性管理職比率も低かったが、女性採用数の拡大などの努力により、全国の理工系女性比率を超える技術系女性比率を達成していることもお話ししていただきました。

ご講演後の交流会では、参加者一同、時間も忘れて熱心に話し合われており、解散は9時近くになってしまいました。有益なひと時を過ごされたようです。



ご講演者：小林 幸子氏(東芝)